

# 海外の障がいアートに対する認識と現状 リサーチ2025

スウェーデン



[Malmö Konsthall](#)

## 目次

1. [サマリー](#)
2. [背景](#)
3. [現状](#)
4. [今後の展望](#)
5. [参照記事一覧](#)
6. [アーティスト紹介](#)

## 1. サマリー



[Studio Syd](#)

### 感じたこと

スウェーデンは、福祉国家として有名な北欧諸国に属するが、障がいを持つ人への対応には遅れがみられる。加えて、同国でアートが格式高いものと認識されていることが、障がいを持つ人のアートでのキャリア構築を阻んでいるように思われた。ただし、EU加盟国の一国として、政策面でEU全体の動きに足並みを揃えると同時に、アート界にも他のEU加盟国から学ぶ姿勢がみられ始めている。だが、教育機関レベルでは、学校毎に方針が異なり、アート関連教育を対象にした政策が現れない限りは、特定の対応方針の採用を控えたいとする学校もみられ、障がいを持つ人のアートでのキャリア構築の可能性拡大の実現は前途多難なものであり続けているように思われた。

アーティストとしての道の選択するしないに関わらず、障がいを持つ人のアートを享受する権利が保障されることは最も基本的な達成事項であり、今後も他のEU加盟国を参考にし・協力して、現状からの変化が展開されるべきではないだろうか。

## 背景

スウェーデンは福祉国家として有名だが、障がい者に関しては動きは遅く、殊に障がい者とアートとの関係はEUの動きに合わせて活発になってきたように思われる

- 今日、北欧の障がい者の組織は、経済的緊縮措置や障がい者へのケアの自由市場主義化(つまり、ケアが商業化すること)等の、現状の問題について鋭く批判的であり、それらの組織は今後も政策策定・社会での議論・障がい者関連法の監督において、重要な役割を果たし続ける。  
→障がい者全体に対する否定的な考えの根源は不明だが、彼らの存在が社会制度の中で可視化されてこなかったため、放置されてきたように思われ、現在でも障がい者側からの積極的行動が重要な役割を果たし続けている状態である

アート関連者の中には、「アート自体は皆が享受できるべきものである」という認識を持つ人びとも存在するが、アートが同国では格式高いものとみなされ、アート系専門学校では尚更であり、障がいを持つ人がアートを専門的に学ぶ機会が限られているように思われる

- 芸術・音楽学校の校長たちの中には、アートと障がいの組み合わせでは「レベルの高い」芸術・音楽」的成果は上がらないと考え、アートを経験するためなら、特別支援学校で授業を受けるだけでよいのではないか、という趣旨の発言をする人もいた。
- (障がいを持つ子どもと思春期の若者にどう接触機会を持つことができるかについて)校長たちが持ち出したスウェーデン語の概念 *funktionshinder* は、能力(の発揮)に対する(ある/複数の)障壁と訳すことができ、「白痴」の概念の言及もされた。彼らは、障がいを持つ子どものための学校と重度の障がいを持つ子どものための学校に対する研修実施について議論し、そこで彼らの中で「自身の芸術・音楽学校に入学する対象者ではない」という意見の合意がなされたようにみえた。
- ある芸術・音楽学校の校長は、障がいを持つ子どもに対する特別活動がないことを説明し、加えて「(障がいを持つ子どもに対する特別活動とは)こういう感じのことかもしれませんが - 対応するのは保健の先生です」と発言した。

だが、学ぶ機会の制限はそれらの専門学校に限ったことではないようだ

- 健全者・障がい者の生徒を対象に実施した2016年の調査から、あらゆる障がいを持つ生徒が6種類のアート活動で一定の参加への制限を経験したことが判明した。ADHD/ADDとディスレクシアを持つ生徒は、6種類のアート活動で常に参加に制限がかけられ、一方他の障

がいを持つ生徒は、いくつかの活動参加にかかることを、他のいくつかの活動で参加を重要視されることで”釣り合いをとらされている”とのことだった。

## 現状

上記の通り、障がいを持つ人とアートとの関係性は今も弱いですが、現在、美術館等の障がいを持つアーティストの作品への注目度の高まりがみられる

- 障がい者アートのアーティストとして活動してはいませんが、障がいを持つアーティストは存在しており、ここ数年、展示会場側は、一定の機能に支障を持つ個人に対する配慮ある支援とサービス法に則った支援による日常活動センターに所属する人びととアート界に所属する障がいを持つ人びとの両方のプロとしての作品への関心の高まりに気づいていた。

EU加盟国として他国からの障がいとアートに関する活動への知識・経験を  
得て、障がいとアートの関連性を高める動きもみられる

- 展示会場Malmö Konsthallは、障がいを持つアーティストのためのアートスタジオ(スタジオSyd)・プロジェクトを始動した。同プロジェクトは、アート・文化部門での障がいを持つ人びとの存在を、彼らの地域のアートの発展への大きな貢献を強調しながら、可視化させることと、彼らの中で新たなプロのアート活動の構造を創出させることを目的とした、スウェーデン南部で障がいを持つアーティストに特化した、本格的なアートの初の取り組みである。スタジオの(存在)目的は、今まで確立されたアート界に加わる機会が得られなかった人びとに、その実現への道を開放させることである。現在当該県には、障がいを持つ人びとがプロとして活躍できる。
- スウェーデンも参加した欧州連合国家文化機関(EUNIC)の講演会の冒頭で、理事は、障がい文化と文化交流に関する主要なテーマとされてきていない事実を訴えた。障がいを持つアーティスト・専門家・鑑賞者の接触機会/(アート施設の)利用可能性は真剣に考慮されるべき、と述べ、理事は、このテーマはEUNICの公平な連携の重視と関連するため、EUNICとその加盟国にとって同テーマは、より重視されるべきものであるとした。また、ヨーロッパで障がいとアートに関して重要な立場に就いている人物は、これまでの障がい者への対応の型、特に障がいの社会モデルによって、障がいを持つアーティストに対する文化的・経済的・個人の態度上での障壁の要素となる構造が意図せず生み出され、彼らのアーティストとしての経歴の各段階で、プロとしての発展を困難にしていると訴えた。
- スウェーデンの障がいを持つ人のアート面での発展と包摂のための組織に属する人物は、障がいを持つアーティストが経験している基本的な障壁の1つに、(組織側の、)障がいを持つアーティストが利用

できるようにするために求められるものに対する知識・理解の欠如がある。障がいを持つアーティストに良質な活動環境を提供するには、[...]唯一無二の方法は存在しない。[...]そして、経済的リソース不足がアーティストに対して多くの障壁を生んでいる。[...]（彼女は）教育の役目の重要性も強調した。エコシステムがアーティストの道程全体に関わるよう、アートに関する高等教育（機関）で多くのことが実行されなければならない、と同じ方向の意見を示した。

しかし、教育現場の状況の変化は直ぐには起きないように思われる

- (障がいを持つ子どもを普通の活動に参加させる際に何か特別な配慮/調整は行っているかを尋ねた結果、)他の生徒と参加ができる個人は普通の活動に包摂されているようだが、特別な配慮/調整は施されていない[...]活動が、障がいのない子どもができる”普通の”ことを基に計画・調整されるという事実が、発言から読み取れる。同じ扱いをされる”平等性”は考慮されるが、個々の状況に応じる”公平性”はそうではない。つまり、芸術・音楽活動への個人の参加は、個人の意思に依るものではなく、”普通の”ことの実行の可否に依るといふ。(それらの回答者にとって)多中心的な包摂(包摂の対象集団が複数)は、”他の人びと”も含まれるかもしれない、支配的な健常者中心が目標として存在する。
- (ある校長は)、私たちは特別活動を設けており、その活動には他の子どもと参加できない子どもが参加していて、大人も参加しています。彼女は、障がいを持つ個人と幼児を比較して話した。彼女の発言によると、障がいを持つ大人は幼児と共通する部分が多いそうで、障がいを持つ子どもと大人の個人のための特定の集団を設けているのだ。その種の混合集団活動が成功を収める可能性はあるが、(執筆者は、)「大人を幼児と比較することでスティグマを生む危険性を孕んでいるように見える」と懸念を示していた。

## 今後の展望

今後は、外国諸国を参考/から学び、障がいを持つ人とアートとの関係を深めていく意欲がみられる

- スタジオSyd設置プロジェクトは、スウェーデン国内の広域での実現可能性調査を基にした。同調査では、障がいを持つアーティストに対する国内外のアート関連組織の支援について検証した。特筆すべき調査結果の点として、スウェーデン国外で彼らを対象にした似た取り組みが極めて盛んであり、現代アートで重要な動きとなっていることが挙げられた。国外の経験豊富な組織から得た発想・構造を、今からスウェーデンでの重要で持続可能な取り組みの構築のために用いる。今回の新しいスタジオの目標は、(スウェーデンでの)ロールモデル/お手本となり、似た取り組みを将来行いたいと考える他の組織に

とっての前例となることである。同プロジェクトは、対象集団の人の希望とアートへの追求心に基づき、プロのアーティストから助言を得ながら展開されていく。プロジェクトの重要な点の1つは、対象集団がプロジェクトの全過程で影響力を持つ状態を保証することである。2025年～2027年のプロジェクト期間終了後は、長期の運営を可能にし、取り組みの更なる発展を図るため、整っている状態になる予定である。国内の他地域で似た取り組みが実施できるよう、汎用性のある取り組みの形にしていく予定である。

教育における障がいとアートのつながりの改善の必要性を指摘する声も上がったが、それには政策の変更または策定・実施が必要と論じる教育関係者もみられる

- 広域な国家包摂政策は、全ての芸術・音楽学校を自治体レベルでの包摂に取り組むようにさせるには不十分であり、(校長たちの議論の中で)彼らは包摂について論じていながらも、芸術・音楽学校に対する特定の国家包摂政策が欠如しているため、障がいを持つ子どもの包摂は義務付けられてはいないとも論じた。言い換えれば、芸術・音楽学校に対する特定の国家包摂政策の欠如が、自治体の包摂政策の欠如を正当化させることができ、“普通さ”に関する考察を支えることになる。
- 特別教育でのアート教育の実践に関わる様々な利害関係者が、特別教育かアート教育のどちらかを強く重視するかで二分化しているという。]知的障がいを持つ子どものための義務教育を施す学校(CSID)でアート教育を実施する際に優先される教師の経歴・能力に関する方針がいかなるもので、教師たちはCSIDでのアート教育をどう認識しており、彼らがいかにアート教育を実施しているかを調査した。結果、教師の特別教育に対する能力を重視する校長の3倍の数の校長が、教師に専門的なアートに関する能力を優先する、ことが判明したが、そのアートに関する能力を優先する程度は、アートの種類に依らず、様々であることも結果は示した。大多数の校長は、アート教育が子どものコミュニケーション能力・創造力・想像力等の、全体的な能力の発達機会を与えるとして、その価値を評価している。

## 2. 背景



(1978年に行われた障がい者の権利運動を取り上げた新聞記事) [Disability policies and movements in the Nordic countries since 1945](#)

スウェーデンは北欧諸国の1国であり、北欧諸国が1つのグループという意識があるように思われる。スウェーデンは福祉国家として有名だが、障がい者に関しては動きは遅く、殊に障がい者とアートの関係はEUの動きに合わせて活発になってきたように思われる

- 障がい者協会は19世紀初頭から既に存在していたが、協会の会員のケアの大部分は彼らの家族・自治体の貧困救済/慈善事業の責任であった。それらの協会は、[...]それらの組織は共に、障がいを持つ人を健常者から隔離し、様々なニーズや障がいを区別した障がい者ケア制度を構築し、20世紀に入っても続けていた。
- 1940～1950年代の現代的な福祉政策の実施により、障がいを持つ人は公的な社会保護の対象に含まれるようになった。だが、伝統的な国家運営の施設制度は維持・拡大され、障がいを持つ人と健常者の差はかつてなく広がった。物理的(地理的)孤立に加え、身体的・感覚障がいを持つ人のための施設は適切な教材や余暇活動の場が不足していたことが多く、[...]就労機会を彼らに与えることはほとんどなかった。そして、知的障がいを持つ人は優生学の見方の存在により、生涯を施設で送るようさせられ、生殖機能の喪失等の医療処置を受けさせられ、それは1970年代の途中まで合法的に続いた。障がいの医学モデルが広く浸透していたことは明らかであった。
- 1950年代以降、障がい者が置かれている状況を問題視する団体が現れ始め、メディア報道もされるようになり、1960～1970年代には、障がい者の権利のための活動家(障がい者である活動家も含む)が北欧だけでなく世界規

模で新しい社会的な動きとして活動を展開するようになった。障がい(を持つ人びとの状況)を北欧諸国の福祉社会において存在し続ける欠陥の証として取り上げ、視覚・聴覚・移動等の様々な障がいを持つ人びとは、包括的であるクロスディスアビリティの考えの下、改革を要求する声を統合・強化させた。それらの議論の中で、障がいとは、社会的・政治的・環境的要素により形成された人権問題であるという、それまでの障がいの医学モデルと対立する新たな解釈が生まれた。

- 今日、北欧の障がい者の組織は、経済的緊縮措置や障がい者へのケアの自由市場主義化(つまり、ケアが商業化するという事)等の、現状の問題について鋭く批判的であり、それらの組織は今後も政策策定・社会での議論・障がい者関連法の監督において、重要な役割を果たし続ける。
- 障がい者全体に対する否定的な考えの根源は不明だが、彼らの存在が社会制度の中で可視化されてこなかったため、放置されてきたように思われ、現在でも障がい者側からの積極的行動が重要な役割を果たし続けている状態である

アートと障がいという観点で、芸術・音楽学校の校長たち(=それらの専門家にほぼ等しい存在)の中には、アートと障がいの組み合わせでは”レベルの高い”芸術・音楽”的成果は上がらないと考え、それらの経験を得るならば、特別支援学校で授業を受けるだけでよいのではないか、という趣旨の発言をする人もいる

- (障がいを持つ子どもと思春期の若者にどう接触機会を持つことができるかについて)スウェーデン語の概念funktionshinderは、能力(の発揮)に対する(ある/複数の)障壁と訳すことができ得り、”mongoloid(白痴)”の概念の言及もされた。議論の始めに、校長たちが障がいを持つ子どものための学校と重度の障がいを持つ子どものための学校に対する研修実施について議論した時点で彼らの中での意見の合意がなされたようにみえた。これは、自身の芸術・音楽学校に入学する対象者ではない、との主張に思われる。
- ある芸術・音楽学校の校長は自身の学校について言及した際、障がいを持つ子どもに対する特別活動がないことを説明し、「(障がいを持つ子どもに対する特別活動とは)こういう感じのことかもしれません - 対応するのは保健の先生です」と発言した。
- スウェーデン政府が芸術・音楽学校に対する”国家方針”の策定のためにそれら学校に関する調査を依頼し[...]調査の初期段階で、”全ての子どもに提供することと少数の子どもの突出したスキルを伸ばす”ことの間で緊張状態が生じ、それは、少数の子どもの突出したスキルを伸ばすことが最重視されることが難しいテーマである場合に、全ての子どもに提供することが考慮外の目標であり得ることを示している。(つまり、芸術的才能を示す子どもへの支援が重視されない状況では、そうではない子どもへの支援は論外であるということ)”突出したスキル”という言葉が意味するものは、アートを大学・大学院で学

ぶことができる可能性があり、その少数の子ども自身も向上させる意欲を持つ上級スキル、と芸術・音楽学校の校長が言及したものである。

障がいを持つ子どもは、芸術・音楽学校ではない学校でも参加を制限されているようでもある

- スウェーデン・スコーネ県で健常者・障がい者の生徒2万7,395人を含めた2016年に実施された公衆衛生調査に関する人口に基づき他部門にわたる調査から、あらゆる障がいを持つ生徒が6種類のアート活動で一定の参加への制限を経験したことが判明した。ADHD/ADDとディスレクシアを持つ生徒は、6種類のアート活動で常に参加に制限がかけられ、一方他の障がいを持つ生徒は、いくつかの活動参加にかかることを、他のいくつかの活動で参加を重要視されることで”釣り合いをとらされている”とのことだった。

ただし、アート自体は皆が享受できるべきものであるという認識もみられる

- ある芸術・音楽学校の校長はためらいながらも、彼の芸術・音楽学校は(障がいを持つ子どもの包摂)に対して取り組む必要があることを認めた。彼は彼が校長である芸術・音楽学校に属する者として、“私たち”には“発展の可能性”があると述べたが、その発言は、(a)その責任は彼だけではなく芸術・音楽学校全体にあり、(b)この問題は(対応の)責任放棄がされていないものである、と強調しているように思われた。各学校レベルではなく、教育部門または更に上の社会/政府レベルでの議論が必要なテーマだと主張しており、それに賛同する校長たちも何人もいた。

### 3. 現状



[Conference: Inclusive Processes Within Performing Arts](#)

上記の通り、障がい者の存在は可視化されてきているものの、障がいとアートの関連性は薄いようである

- スウェーデンの人口の36%が障がいを持つというのに、障がいを描写した公共のアート作品はほとんどない。これはいくつかの理由から問題であると考えられる: まず、障がいを持つ人びとが自身を反映させることができていることが問題で、そして、健常者が障がいを持つ人の存在を思い出すことができないことも問題である。[...]スウェーデンの民主性に制限があることが明確にわかる。アートとアーティストは優先的に扱われず、障がいを持つ人は実際に、スウェーデンのアートに関連した面に貢献するための機会を健常者と同等には与えられておらず、それが彼らの社会参加を妨げ、民主性を低くしているのだ。
- ただし、ノルウェーの学者Per Koren Solvangの”障がい者アート”の定義では、”障がいを持つアーティストが、自身の障がい経験に影響を受けて制作し、障がい者への支持と社会への受け入れを求める”ものであり、障がい者アートのアーティストとして活動してはいないが、障がいを持つアーティストは存在する。

→実際に、ここ数年、展示会場側は、LSS(一定の機能に支障を持つ個人に対する配慮ある支援とサービス法)(障がい者保護法)支援による日常活動センターに所属する人びととアート界に所属する障がいを持つ人びとの両方のプロとしての作品への関心の高まりに気づいていた。

## EU加盟国として他国からの障がいとアートに関する活動への知識・経験を得て、障がいとアートの関連性を高める動きもみられる

- 2025年春、展示会場Malmö Konsthallは、スウェーデン・スコーネ県で障がいを持つアーティストのためのアートスタジオ(スタジオSyd)・プロジェクトを始動する<sup>1</sup>。同プロジェクトは、アート・文化部門での障がいを持つ人びとの存在を、彼らの地域のアートの発展への大きな貢献を強調しながら、可視化させることと、彼らの中で新たなプロのアート活動の構造を創出させることを目的とした、スウェーデン南部で障がいを持つアーティストに特化した、本格的なアートの初の取り組みである。スタジオの(存在)目的は、今まで確立されたアート界に加わる機会が得られなかった人びとに、その実現への道を開放させることである。現在スコーネ県で、障がいを持つ人びとがプロとして活躍できる機会が他の文化部門は存在するものの、視覚芸術ではその機会が存在しなかった。[...]スタジオのプロジェクトはMalmö Konsthallが主導し、マルメ市の文化局と支援サービス局・マルメ市の文化組織 Konstfrämjandet Skåne・NPO法人Kultur och Kvalitet・ストックホルムを拠点とする、障がいを持つアーティストのための組織Ateljé Inuti・マルメ市の不動産管理会社MKB Fastighets AB・マルメ大学との連携により行われる。国外の(参考)源には、アメリカのNPO法人Creative Growth Art Center・イギリスの先駆的視覚芸術組織Intoartを含む。
- スウェーデンも参加した欧州連合国家文化機関(EUNIC)の講演会で、理事 Gitte Zschochが、文化と文化交流に関する主要なテーマとされてきていない事実を訴えて、講演は始まった。障がいを持つアーティスト・専門家・鑑賞者の接触機会/(アート施設の)利用可能性は真剣に考慮されるべき、と述べ、彼女は、このテーマはEUNICの公平な連携の重視と関連するため、EUNICとその加盟国にとって同テーマは、より重視されるべきものであるとした。また、Ben Evansは、これまでの障がい者への対応の型(障がいの社会・慈善・医学モデル)とは異なる(新たな)型を説明した。特に障がいの社会モデルによって、障がいを持つアーティストに対する文化的・経済的・個人の態度上での障壁の要素となる構造が意図せずに生み出され、彼らのアーティストとしての経歴の各段階で、プロとしての発展を困難にしている: "彼らは機能面での支障を持つだけだが、社会によって機能不全にされているのです"。Benは、障がい者が鑑賞者として完全に平等なアートに触れる機会を妨げる障壁への対応はアート・文化組織の責任だが、アーティストと専門家としての彼らへの対応も同等に重要であると訴えた。"私たちの組織はそれらの障壁への対応として何をしていますか。私たちは障がい者の文化面への参加を支援する文化的エコシステムに意識的になるべきである"。

<sup>1</sup>参照記事は、プロジェクト始動前に書かれたものである。

- スウェーデンのSophia Alexanderssonは、障がいを持つアーティストが経験している基本的な障壁の1つに、(組織側の、)障がいを持つアーティストが利用できるようにするために求められるものに対する知識・理解の欠如がある。障がいを持つアーティストに良質な活動環境を提供するには、[...]唯一無二の方法は存在しない。[...]そして、経済的リソース不足がアーティストに対して多くの障壁を生んでいる。[...] (彼女は)教育の役目の重要性も強調した。エコシステムがアーティストの道程全体に関わるよう、アートに関する高等教育(機関)で多くのことが実行されなければならない、と同じ方向の意見を示した

しかし、教育現場では普通の活動と特別活動への参加等、問題は今も残る

- (執筆者によると)方針策定者・学校長・実務者にとって問題となるのは、音楽教育を全ての子どもと思春期の若者に提供すべきか否かという点ではなく、いかに全ての子どもと思春期の若者に提供できるのか/すべきかという点であった。普遍的な解決策というものには存在しないということ認識することは重要である; 対象となる個人の数だけの解決策が存在するかもしれない。

社会によって定義付けられる”普通さ”に関する考察が教育現場の状況を生み出しているようにも感じられる

- (障がいを持つ子どもを普通の活動に参加させる際に何か特別な配慮/調整は行っているかを尋ねた結果、)他の人びとと参加ができる個人は普通の活動に包摂されているようだが、特別な配慮/調整は施されていない[...]活動が、障がいのない子どもができることを基に計画・調整されるという事実が、発言の言い回しからわかる。同じ扱いをされる”平等性”は考慮されるが、個々の状況に応じる”公平性”はそうではない。社会によって定義付けられる”普通さ”の考えは、芸術・音楽活動を重視するが、それらの活動に参加したいかもしれない個人を必ずしも重視してはいない校長たちの論点を構成していた。(それらの校長たちにとって)多中心的な包摂(包摂の対象集団が複数)は[...]”他の人びと”も含まれるかもしれない、支配的な健常者中心が目標として存在する。
- (ある校長は)、障がいを持つ子どもの内、グループ活動に参加できる子どもは同じ条件で参加するが、個人活動で参加する子どもは時間が他の子どもよりかかる可能性がある」と説明した。その場合、普通の活動の中の個人活動に対してだけではあるが、特別な配慮/調整は施されるという。特別活動やグループ活動の際に特別な支援が必要であるがために、全く参加しない子どもがいるかは不明であった。この発言でも包摂に関する考察と社会によって定義付けられる”普通さ”に考察の間で生じている問題が明らかだった: ”普通さ”に関する考察が一切の障がいに対する釣り合わせを行わない校長の目標を構成させる一方、包摂に関する考察は、公平性を追求し、費やす時間を調整して障がいに対する釣り合わせを行う校長の目標を構成させている。

- (ある校長は)特別活動と普通の活動の関連付けにて言及し、「教師は彼らが特定の楽器に興味があるようであることに気づいたら直ぐ、教師は彼らができるようになるだろうかを判断し、(できると判断した場合、)彼らが楽器を使いこなせるように支援します」と述べた。この発言は、全ての子どもを現行の(学校の)教育構造の中で複数の構造を同時進行させることで包摂させる例の1つを示している。この事例でさえも、包摂に関する考察と”普通さ”に関する考察の間で生じている問題がみられる; 現行の構造での包摂は、”できるようになるだろう”とみなされた条件下で実現する。(執筆者はこの発言を、)[...]方針の実行の1つの例、または言い換えれば、[...]実践の場での包摂の方針の校長による概念化であり方針の循環の形成への貢献である」、と評している。
- 多中心的な包摂の考察は、障がいを持つ個人に焦点を当て、個人に合わせて特別活動を設ける校長の論点を構成し、障がいを持つ子どものための特別活動を設けることの重要性を強調する際に示され・行使された。校長たちが包摂のための配慮/調整について議論した際に、実践の場での方針に沿った実行がされていると言及があった。ここからは、障がいを持つ個人のアート経験の享受の可能性は学校、究極的には教師に左右されることを意味しているように思える。
- アート・音楽活動の複合活動を特別活動とさせている事例を、(ある校長は)説明した:「私たちは(XXという)特別活動を設けており、その活動には他の子どもと参加できない子どもが参加していて、大人も参加しています」。また]彼女は、障がいを持つ個人と幼児を比較し、彼女の発言によると、障がいを持つ大人は幼児と共通する部分が多いそうで、障がいを持つ子どもと大人の個人のための特定の集団を設けているおいう。(執筆者は、)[その種の混合集団活動が成功を収める可能性はあるが、大人を幼児と比較することでスティグマを生む危険性を孕んでいるように見える」と懸念を示している。スティグマ化とステレオタイプの意見を認識し、その打破に取り組む能力に関する、アメリカ人学者Alice-Ann Darrow<sup>2</sup>の意見の考慮の必要性が存在する。その校長の議論の中で包摂と”普通さ”に関する考察が混ざって、提示・行使されており、”普通さ”に関する考察は、障がいを持つ大人を”大人”とみなさない校長の論点を構成し、障がいを持つ大人を幼児と比較させるようにした。

また、芸術・音楽学校は専門学校であり、その分野の学校としての評価も重要なものかもしれない

- (ある校長は)、彼の学校は”全てを受け入れ試み、(子どもが)成功を収めることができなかったからといって、(子どもに学校での学びの継続に対し)ノーと言わなければならないことは無いです」と述べた一方、(別の校長は)、”従わなければならない特定の方針は(自身の学校には)ありませんが、

<sup>2</sup>多様性と社会正義(社会の構成員である人びとが平等に扱われ、社会全体の福祉の保障と秩序の維持を実現すること。また、そのために社会の構成員の各人が持つべき考え・心のあり方や・守るべき社会ルールを指す。)は教育者がその他の事柄がある中で、障がいを持つ人びとに関するステレオタイプ的でスティグマを生む議論を認識する能力と密接に関係しているという見解を示している学者。

入学へ出願し問題が現れた際に解決できる個人はもちろん全員受け入れます”、と述べた。それは、[...]特定の子どもを受け入れないようにする必要性があるのではという疑念を(執筆者に持たせるものだった); 子どもが成功を収めることができなかつた場合、それは芸術・音楽学校の責任にはされないだろう。”普通さ”に関する考察は、”普通”から外れる人びとは排除され得ることを暗示した。

## 4. 今後の展望



[Konstlyftet offers a creative space based on each person's individual needs.](#) 写真: Helena Pataki

興味深いことに、これまでの全ての調査国はスウェーデン同様、非英語圏だが、障がいを持つアーティスト自身による1の声が聞こえる記事が存在していたのにもかかわらず、スウェーデンの障がいを持つアーティスト自身による1の声が聞こえる記事は(少なくとも英語では)発見できなかった。しかし、少なくとも障がいを持つアーティストは存在しており(障がい者アートのアーティストとして自身を特徴づけているかは別として)、福祉施設でのアート活動の機会に参加する人びとの存在(彼らのアート活動の種類は不明)も確認できた。また、障がいとアートのつながりの強化への意欲も示されていた

- スタジオSyd設置プロジェクトは広域での実現可能性調査を基にしており、障がいを持つアーティストに対する国内外のアート関連組織の支援について検証した。調査結果の中で特筆すべき点として、国外で彼らを対象にした似た取り組みが極めて盛んであり、現代アートで重要な動きとなっていることが挙げられる。国外の経験豊富な組織から得た発想・構造を、今からスウェーデンにおける重要で持続可能な取り組みの構築のために講じられる。マルメ市のこのスタジオの目標は、(スウェーデンでの)ロールモデル/お

手本となり、似た取り組みを将来行いたいと考える他の組織にとっての前例となることである。同プロジェクトは、対象集団の人びとの希望とアートへの追求心に基づき、プロのアーティストから助言を得ながら展開されていくものである。プロジェクトの重要な点の1つは、対象集団がプロジェクトの全過程で影響力を持つ状態を保証することである。従って、2023年1月、コーネ島のLSSの支援を受けた活動の代表者たちから成る協議グループが発足し、同年中にわたるスタジオの計画作業に関与した。2025年～2027年のプロジェクト期間終了後は、長期の運営を可能にし、取り組みの更なる発展を図るため、整っている状態になる予定である。国内の他地域で似た取り組みが実施できるよう、汎用性のある取り組みの形にしていく予定である。

- (2017年)スウェーデンで、スウェーデンと日本の外交関係150周年記念として、展示会“Art Brut -Sverige och Japan”が開かれる<sup>3</sup>。日本の障がいを持つ人びとの文化とアートの国際交換プロジェクトの一環である展示会が、スウェーデン・ソレンツナ県に位置するEdsvik Konsthallで行われ、8名の日本人アーティストと17名のスウェーデン人アーティストの作品が展示される。

教育における障がいとアートのつながりを改善すべきとする意見が多くみられた

- (ある校長は、)私たちが(XXという普通の活動)をしていることを大変誇りに思っており、(そこでは)ディスレクシアを持つ子どもが自身の能力を全力投入し、その活動から尊厳と強みを獲得していました。彼らは8歳で学校生活を開始し、私たちは彼らが19歳になったら、学校を去るようにさせなければなりません、と話した。彼の学校のその活動はあらゆる人に提供されており、言い換えれば、能力が混合している子どもたちを対象としていた。その活動は、[...]多様な学習者の包摂の明らかな例の1つであるようだった。[...]空間的(物理的)・社会的包摂の両方が達成されたように思われ、教育的包摂に関しても、子どもの関心を高めさせ、やめたがらせるようにさせないために、それら3つの側面全ての側面への対応が求められることを考慮すると、達成できたと言えるかもしれない。多様な学習者を参加させることは、多中心的方法での包摂と分析され得る。これは、好事例の1つではないだろうか。
- アート教育と特別教育の交差は統合の欠如と特徴づけられており、それは、特別教育でのアート教育の実践に関わる様々な利害関係者が、特別教育かアート教育のどちらかを強く重視するかで二分化していることが原因の1つである。[...]知的障がいを持つ子どものための義務教育を施す学校(CSID)でアート教育を実施する際に優先される教師の経歴・能力に関する方針がいかなるもので、教師たちはCSIDでのアート教育をどう認識しており、CSIDに通う子どもと一般の義務教育を施す学校(CRS)に通う子どもの間の連携と関連して彼らがいかにアート教育を実施しているかを調査した。[...]教師の特別教育に対する能力を重視する校長の3倍の数の校長が、教師に専門的なアートに関する能力を優先する、ということが結果から判明した。だが、そのアートに関する能力を優先する程度は、アートの種類に依ら

<sup>3</sup>参照記事は開催前に書かれたものである。

ず、様々であることも結果は示した。大多数の校長は、アート教育が子どものコミュニケーション能力・創造力・想像力等の、全体的な能力の発達機会を与えるとして、その価値を評価している。アート教育のためのCSIDとCRSの連携に関しては、学校の運営能力の機能次第であるようにみられた。

しかし、教育面での問題は政策の欠如にあり、政策策定が第一に求められる(それによって学校が対応)べきとの意見も多くみられた

- (校長たちは議論の中で)方針と包摂が交差する形で言及された: 彼らは国家包摂政策が欠如していながらも、包摂について論じ、国家包摂政策が欠如しているので、障がいを持つ子どもの包摂は義務付けられてはいないと論じた。言い換えれば、芸術・音楽学校に対する特定の国家包摂政策の欠如が、自治体の包摂政策の欠如を正当化させることができ、“普通さ”に関する考察を支えることになる。広域な国家包摂政策は、全ての芸術・音楽学校を自治体レベルでの包摂に取り組むようにさせるには不十分である。政府が多様性を配慮しそれを克服する、公平で包摂的な音楽教育に関する、民主的価値の維持に成功するならば、芸術・音楽学校に対する特定の国家包摂政策の存在が強く求められる。(一方執筆者は、)「“普通さ”に関する考察により、特別活動と普通の活動の間には隔たりが存在するように見え、普通の活動において、空間的(物理的)包摂だけでなく、社会的・教育的包摂も提供されるのであれば、特別活動に参加する子どもの中の何人かは普通の活動参加できるかもしれない。多様な子どもを参加させた会議を設けることは、公平で民主的な音楽教育に寄与するかもしれない。また、それは多中心的な包摂を実施する1つの方法にもなり得る。芸術・音楽学校の校長たちは、包摂的な実践の展開に困難を経験しており、その解決策の1つは、彼らの政策策定・政策構築・政策変更・政策実施への関与である」、としている。

## 5. 参照記事一覧

- [Democratic art scene called for in Sweden](#)
- [Disabilities within Sweden's Art and Music Schools: Discourses of inclusion, policy and practice](#)
- [Disability and Arts Education. From Unequal Participation to Opportunities for Innovation](#)
- [Studio Syd](#)
- [EUNIC Talk: Arts & Disability - Access, Artistic Innovation and Cultural Relations](#)
- [Art Brut - Sweden and Japan exhibition](#)
- [The arts: a precious part of special education? How principals value and organise arts education in compulsory school for pupils with intellectual disability in Sweden](#)
- [Sweden](#)
- [Disability policies and movements in the Nordic countries since 1945](#)
- [The state of discrimination in Sweden 2024](#)

## 6. アーティスト紹介

- LARS MULLBACK



- Felicia Sparrström



- [Lena Maria Klingvall](#)